

平塚らいてうと旅

ほり けい こ
堀 恵 子

大阪教育大学教養学科欧米言語文化講座

(平成7年4月28日 受付)

平塚らいてうの名は、日本における女性解放の歴史の中で今も変わらぬ光を放っている。女性の手による文芸雑誌『青鞥』の発行や新婦人協会の設立、「若い燕」と呼ばれた奥村博との共同生活、与謝野晶子との「母性保護論争」と、らいてうの言動は常に世の人々から非難と賞賛で迎えられた。本稿では、そのらいてうと旅という、これまであまり注目されなかったテーマを取り上げ、彼女にとって旅とは何であったか、旅が彼女にどんな影響を与えたかを考察し、平塚らいてうという偉大な人物の全体像を把握する一助としたいと思う。なお本稿でいう旅には転地療養などの比較的長期間の滞在も含まれている。らいてうは1923年、千駄ヶ谷の路地裏の借家で関東大震災に遭遇するが、本稿では大震災以前の旅を主として扱っている。

キーワード：文学，平塚らいてう，旅，自然

I

東京の麴町区（現在の千代田区）三番町に生まれ、小学校三年の時、本郷駒込曙町に引越した平塚らいてうが、初めて海らしい海を見たのは、お茶の水高等女学校に入学した年の夏のことであった。お台場の並ぶ東京湾しか見たことのないらいてうにとって、相州葉山の海の印象は強烈なものだったようだ。その時の衝撃を彼女は次のように書いている。

今見ればあの静かな——小さな波がむしろ退屈そうに終日岸に寄せているあの御用邸下の箱庭式の海が、まあ何という大自然の威力をもって幼いわたくしの全存在を圧倒したことでしょう。（中略）一浪去っては一浪くるこの休みのない生きものの海のからだをじっと見てると何かしら全宇宙を支配する生命力とでもいうようなものがわたくしのからだ中に伝わってきて両脚がわなわなとふるえてきました。¹⁾

また、らいてうの山への最初の憧れは富士登山への熱望という形で現れている。彼女は富士山を日本一、いや世界一の霊峰と信じて、富士山に関する文献を手当たり次第集め、富士登山計画を密かに練っていたのだった。しかしこの計画も、そんなところは女や子供の行く所ではないという父の一言で、実現の見込みはなくなってしまったのである。彼女は当時を振り返って、「日本地図を拡げてみて、あちらへもこちらへも行こうと思っていたところをみると、富士への憧れは、旅行への憧れの変形だったのかもしれませんが」²⁾と